

私を支える 至高の一冊

国立病院機構理事（看護担当）
東京医療センター副院長
久部洋子さん



東日本大震災を経て出版されたアルフォンス・デーケン先生の『心を癒す言葉の花束』。この本には、多くの人が死を経験した困難なときこそ日本が新しい文化を創造する好機であるとして、その糧となる言葉が綴られています。一般の方へ向けて分かりやすく軽やかに書かれている本書ですが、実はその発行のずっと以前に、医療関係者への専門書として『死への準備教育』が出版されており、本書にはこの専門書のエッセンスがすべて盛り込まれているのです。

“死といかに向き合うか” この難題を看護学生に“どう教えれば”と悩んでいた 20 代後半に出会ったのが、『死への準備教育』でした。当時は、死を語ることがどこかタブー視されていた時代です。死と向き合い、看取るとはどういうことかを正面から問いかけてくるこの本は、看護師として教師として、一人の人間として、若き日の私にとっても多くのことを教えてくれました。

日本は、まもなく他国に先駆けて多死社会に突入しようとしています。社会全体で死への準備が必要な時代になってきたといっても過言ではないでしょう。死を考えることは、生を考えること。「死に逝く人をいかに温かく見守るかは社会や文化の成熟の度合いをはかる尺度となる」。本書の中の先生の言葉です。私たち一人ひとりが死と正面から向き合い、日本の社会・文化の成熟を図るべき時期を迎え、気づきの一助になればとの想いを込めて、この本をご紹介します。

『心を癒す言葉の花束』
アルフォンス・デーケン著
集英社新書

*今回ご紹介した書籍を抽選
で3名様にプレゼントしま
す。アンケートをご覧ください。

